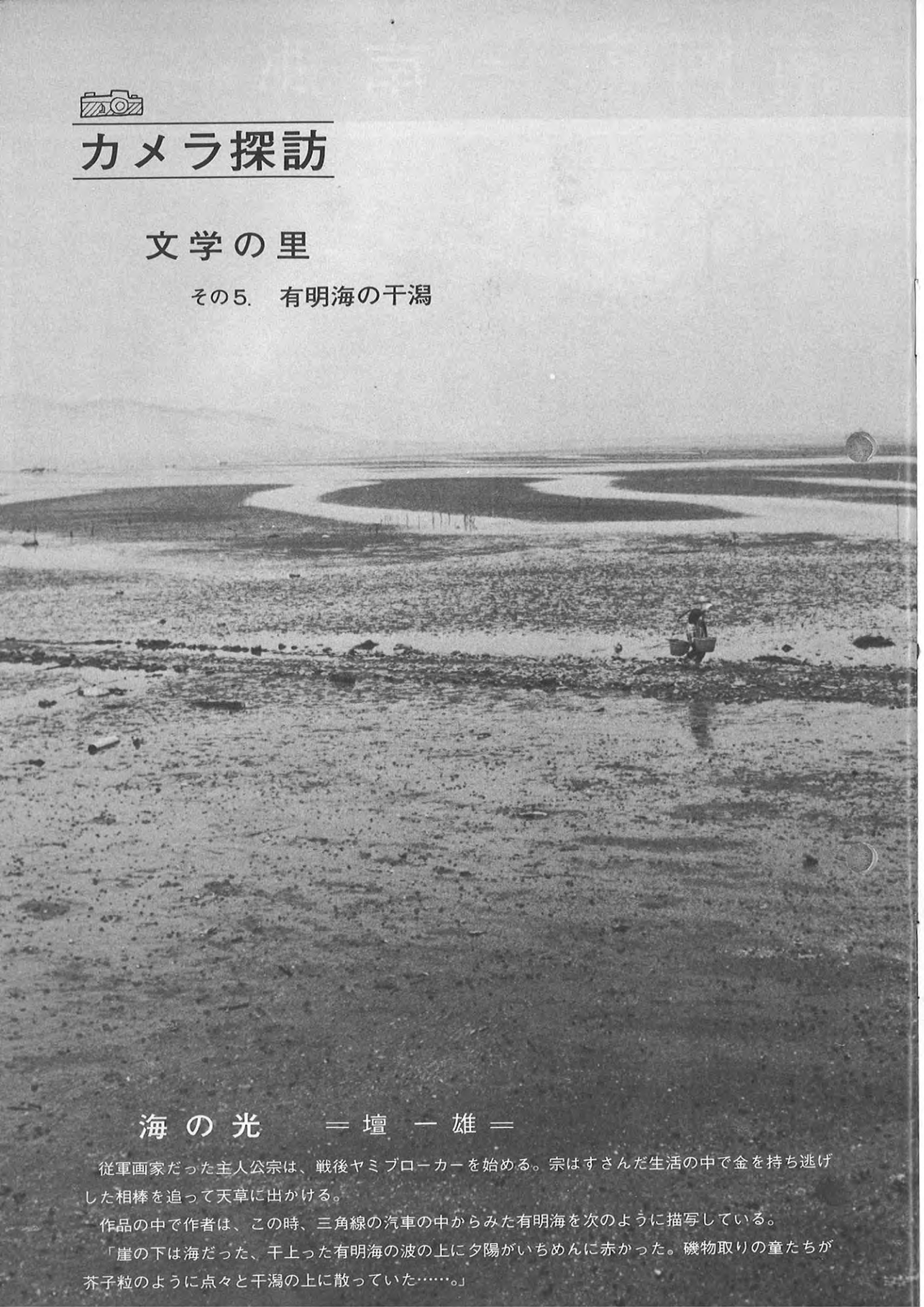
カメラ探訪

文学の里

その5.　有明海の干潟



海の光　＝壇一雄＝

従軍画家だった主人公宗は、戦後ヤミブローカーを始める。宗はすさんだ生活の中で金を持ち逃げした相棒を追って天草に出かける。

作品の中で作者は、この時、三角線の汽車の中からみた有明海を次のように描写している。

「崖の下は海だった、干上った有明海の波の上に夕陽がいちめんに赤かった。磯物取りの童たちが芥子粒のように点々と干潟の上に散っていた……。」

わたしのぼくの郷

芦北町立佐敷小学校　六年　川口美奈子

私たちの郷土、芦北町は東には大関山、西には不知火海をひかえ、山の幸、海の幸にめぐまれた豊かな町で、四つの町村ががっぺいしてできた、県下でも二、三位の大きな町です。中央の佐敷に、役場や県事務所などがおかれています。

万葉集に、「芦北の野坂の浦ゆ船出して水島に行かむ波たつなゆめ」、という歌があります。万葉集に私たちの郷土の歌があることは、なんと喜ばしいことでしょう。

また、小学校の前の城山には、むかしは城があり、佐敷は城下町、宿場として栄えました。

このように、むかしから栄えてきた、芦北町は、今は農林業を、中心とした町になり、その中でも、特に甘夏作が盛んで、甘夏の里とまで呼ばれ、そのおいしさは日本一です。

芦北町で作られた、甘夏は「㊥」の甘夏として関西をはじめ、関東、北九州さらには、遠く北海道方面まで大量に出荷されています。

観光の方でも、雲仙―天草―宮崎を結ぶ幹線として、大型フェリーの就航が計画され、また国民休養地芦北海岸として、つる木山にいろいろな施設ができつつあります。今はまだ海水浴場と、遊歩道や駐車場などしかできていませんが、近く宿舎、運動施設などもできる予定です。

海のむこうに見える天草島、その途中に浮かぶ三ツ島その中を、帆にいっぱい風を受けて、うたせ網漁の船が、静かに流れて行く様子はまるで絵のようです。島の松は、とてもあざやかな色で、いきいきとしていますし、深くすみきった海水の中では、貝、真珠貝の養しょくが、行われています。

これほどすばらしい、私たちの郷土を、永遠の時の流れとともに、私たちはなお深く愛し続けて行きたいと思います。